笑う裏社会

島田文昭著 Fumiaki Shimada

Forest
2545
Shinsyo

No man is an island, entire of itself ;
every man is a piece of the continent, a part of the main.

あなたは大海にぽつんと浮かぶ孤島だろうか？
一方、あの彼の人生が世界のすべてと言えるだろうか？
あなたと彼、表と裏、日常と非日常……
すべては大陸の一塊、地続きなのだ

『Devotions upon Emergent Occasions』
John Donne、文田草（超訳）より

まえがき

それぞれの街には、それぞれのイメージがある。

若者の街、オタクの街、電気街、コリアンタウンにチャイナタウン、なかにはおばあちゃんの原宿なんてのもある。これらのフレーズから逆に具体的な地名が浮かんだとしたら、そのイメージは、ある程度共有されているということだ。

だが、そのイメージは、正しいのだろうか。本当にその街のすべてを象徴している言葉なのだろうか。

いつもは足早に通りすぎる通りを、30分だけでもいいからガードレールに腰掛けて、観察してみてほしい。いままで気にもとめていなかったものをいくつも目にするはずだ。

通りの入り口で「⑩」と書かれた看板を持って立っている、疲れた顔をしているおじさんは、何をしている人なのだろうか。（正解は裏ＤＶＤ屋の客引きだから）

パチンコ屋の両替所の近くにいる、自分のへその前で親指と親指、人差し指と人差し指をくっつけて輪を作っている男は、どうしてあんなに意味ありげな視線を送ってよこすのだろうか。（正解はポーカーゲーム喫茶の呼び込み）

深夜の薄暗い路地で、「マッサージイカガデスカ」と話しかけてくるアジア系美女は、「アナタナニホシイ？」と話しかけてくる中近東系のイケメンは、何をしている人なのか――は、なんとなく想像できるけど、それでも彼らに声をかけて、彼らに導かれるまま足を進めれば、いままで抱いていた街のイメージなど、いともたやすく変わってしまうだろう。

そうやって、何かひとつでも気になりだすと、不思議なものは次から次へと見つかってくる。

ほぼ歩行者天国と化しているような通行人でごった返している狭い通りに、無理矢理鼻面を突っ込んでくるピッカピカの高級車がある。ナンバーがゾロ目か、「５９１０」「・

８９３」とか、親分の名前をもじったものになっていれば、組事務所に向かう最中のヤクザだろうし、とんでもなく遠方のナンバーなら「金融流れ」といわれる借金のカタにとられた車で、乗っているのもその方面に顔がきく金融屋やブローカーか、そのたぐいの人間だ。おそらくキャバクラにでも向かう途中なのだろう。

終電もなくなったような夜中なのに、ぴらぴらなドレスを扱う古着屋が営業している。ちょっと店内をのぞいてみると、

「本当に古着なんかでいいのかよ？」

「別にいいって。不景気だもん、あんま、お金使わせちゃ悪いじゃん」

「お前は本当にイイ子だなあ」

「そのかわり、今度このドレスを着た日も店に遊びにきてね」

「もちろんさ」

なんていうやりとりを聞くことができるだろう。ここはアフター（もしくは同伴出勤）中のキャバクラ嬢と常連客のための店なのである。そして常連客は、女が選んだドレスが、じつは女の持ち込んだ自前のドレスだということを知らない。

街は、解読されていないテキストに似ている。
集中してにらんでいれば、少しずつ意味が浮かび上がってくる。ただし、あまり集中しすぎると「なにガン飛ばしてんだよ」とからまれることもあるので、やりすぎには気をつけたい。
街は、砂漠のなかのオアシスにも似ている。
昨日まであったものが、今日には蒸発してしまったかのようになくなっている。
かつて池袋には、タイのマッサージパーラーのように、女子高生がひな壇に座って客の指名を待つ店があった。1週間ももたなかったが。
六本木の交差点のところには、女の子のドリンクが無料のキャバクラがあった。ドリンク代どころか、連れだし料も無料だった。店は場所だけ提供しているという建前で、終電のなくなった子か、何らかの事情で家に帰りたくない子が勝手に接客していたのだ。その店ももうない。
毎日、街に出ていれば、時々とんでもなくいい目にあうことがあるし、とんでもなく

ひどい目にあうこともある。

風俗店でついた子がアイドル並みのかわいさで、おまけに「イヤらしい気持ちになっちゃった」と言って払った料金以上のきめ細かなサービスをしてくれるかもしれないし、その数日後、オシッコに膿が混じることになるかもしれない。合法ドラッグ屋で焚いた新作の脱法ドラッグがスパゴ（＝スパイスゴールド）以来久々のアタリで、気がついたときには無敵状態のマリオよろしく街中のはてなボックスを破壊してまわっているかもしれない（全裸で）。クラブで踊っていたら、見知らぬ美少女からＭＤＭＡを口の中に放り込まれるかもしれないし、その直後に踏み込んできた刑事たちに小便を採取されて青ざめるかもしれない。

それはわからない。でも、わからないからこそおもしろいのかもしれない。

ぼくは「青年実話誌」と呼ばれる、あまり上品ではない雑誌のライターを10年以上やってきた。その間、見聞きしたあんな下世話、こんな下世話を本書ではじゃかじゃか紹介していくつもりである。

もっとも、えらそうに語っているが、街にはぼくの知らないことなど、まだまだいくらでもある。

ついこの前もこんなことがあった。繁華街の外れにある、知人の闇金融屋の事務所に遊びにいったときのことだ。一緒にエレベーターに乗っていると、知人がこう言ったのである。

「この階のボタン、押してみてよ」

言われた階の停止ボタンを何度カチャカチャ押しても、ボタンのランプが点くことはなかった。

「この階と、その上の階がまるごとヤクザの事務所になってるんだよ。それで勝手に床をぶちぬいて、上の階を通らないと下の階に入れないように改造しちゃったんだよ」

なんということでしょう。匠がマンションの床に穴を開けてしまったのです。たぶん大家さんには内緒で。

この手のマンションは通称「ヤクザマンション」と呼ばれるもので、繁華街のいたる所に建っているという。そして更新のたびに普通の住人は出ていき、知人のような闇金

屋や得体の知れないブローカーばかりが入居してくるのだ。そんな話を聞くと、どうもマンション全体から異様な磁場が発生しているようで、なんとなく息苦しくなる。

知人の事務所のある階でエレベーターを降りると、非常階段のホールのほうからキンキン声が響いてきた。若い女が誰かと大声で電話しているようだった。

あまりの女のハイテンションぶりにどんな顔をしているのか気になり、知人の制止を振りきってのぞきにいった。薄汚れた制服を着た女が、痛んだ長い髪をいじりながらスマートフォンに向かってわめきたてていた。同僚に聞かれたくなくて、こんなところで電話しているのだろうか、と思ったのだが、よく見たら女が手に持っていたのは携帯電話ではなく電卓だった。

もっとも他人から見たら電卓でも、彼女から見たら携帯電話なのだろう。この本には実話誌ライターとしてのぼくから見た真実を書いたつもりではあるが、他人から見たらやっぱり電卓なのかもしれない。

その自覚も少しはある。

まるであやしい雑居ビルの、重たいスチールドアを開けるような気持ちで、本書のページを繰ってもらえれば、これにまさる喜びはない。そして読後に、いっちょ街にでも繰りだしてみっか、という気になってもらえれば、著者としては望外の喜びである。

もくじ◉笑う裏社会

まえがき 3

第1章　隣のアウトロー

「半グレ集団」とは何か？ 悪の「半グレ」集団／原付スクーターで人間を拉致する方法／刺すんじゃなくて叩くんだよ／バイクも人間も轢き放題！ 18

地元を牛耳る「リアルジャイアン」 通称「デブ・サップ」／1人1000円払って、バトル・ロワイアルごっこ 28

「クレーマー」対処の鉄則とは？ 100人いれば、100通りのクレームがある／クレーマーズ・ハイ 34

ポン中系「女子」（15歳、都内在住） 暴論!? 覚醒剤解禁論／周りはみんなシャブ漬けにしてやった／狂気！ 友人だってシャブ漬けに！ 41

ここがヘンだよ「外国人マフィア」 パトカーと平気でカーチェイス／イスラエル人マフィア「戦争は決シテナクナラナイ」／裏びでお、観ニ来ナイカ 49

第2章　カッコつけ男たちの無防備な瞬間

耳をすませば「ヤクザ」の声が　62
ヤクザ専門の盗聴マニア／人生は夜間独居やぞ

なぜ「不器用な男」はシブいのか？　67
おれが一生、面倒をみてやる／ちょっとションベン／味よりも値段の安さで知られるチェーン

「身体改造愛好者」の天国　74
笑ってはいけないサウナ／ヤクザのダンディズム

不屈の「不良」魂（スピリット）　80
判決は懲役20年／某大学の偽造成績証明書と偽造卒業見込証明書を入手／アウトローの世界では、やられた者が負け

第3章　お金にだらしない人、厳しすぎる人

「ボッタクリ」は地獄の一丁目　90
「抜群にヒドイ（被害者談）」と評判の店／計19万6000円也

負け組・勝ち組「多重債務者」の話　98
駅前に、いくらでもお金が出てくる機械があるよ／あっという間に借金が限度額いっぱい／生活費なんて1円も残っていない／「賢い」多重債務者／消費者金融は人にやさしい企業!?

「闇金業者」100人ツアーの思い出　111
気持ちのいい朝にヤクザや闇金屋と待ち合わせ／遊び人の遊び方んて1円も残っていない

「輩（ヤカラ）」の錬金術師　117
負けたほうが得るものが大きい／ヤクザに学ぶ自己演出術多重債務者

第4章　一応だけど、カタギの方々

1998年の「ファッションモンスター」　124
自分の鼻クソのプリントTシャツ／なかばオフィシャルな海賊版／アイドルが抱かれたくてアプローチしてくる／祭りのあとと街宣車

「ヒモ師」列伝　134
ズバリ、シャブですワ／「貢いでもらう」という感覚／2億、くらいかな。それと車が6台

「政治家」はその国の民度　143
100人斬りの政治家はゴロゴロ／国会議事堂を見下ろしながらやってた

がんばれ！「町のおまわりさん」　152
エロブログ開設者にも人格者はいる／元マル暴刑事の恨み節／右翼と公安の蜜月関係!?

第5章　それぞれの生き様と死に様

最凶の「ネゴシエーター」新説《ヤクザ＝ダム》論／1人は殺らにゃ／おれが爆弾積みこんで、相手の本家に突っ込みます　164

「ヒットマンズ」ブルース　分の悪いギャンブル／刀を身体からブラブラさせながら斬り合ってる／これから人を殺そうとしている人間／ブワッと鳥肌が立った／人を殺しに行くための安全運転　173

「オタクヤクザ」と「ヤクザオタク」IT知識のある若い衆のニーズ／「裏社会」を笑え　186

私の「エロ本編集者」時代　配属されたのはエロ本の部署だった／エロマエストロたちのたゆまぬ努力とあくなき挑戦／島田の作っているエロ本を発売したら、社長を逮捕するぞ　203

あとがき　123

カバーフォーマット◎panix(keiichi saito)　カバーデザイン◎村松のぞみ（井上則人デザイン事務所）
DTP◎株式会社システムタンク　本文デザイン◎フォレスト出版編集部